

2021. 9. 26 (日) マタイ27:1~5

27:1 さて夜が明けると、祭司長たちと民の長老たちは全員で、イエスを死刑にするために協議した。

27:2 そしてイエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。

27:3 そのころ、イエスを売ったユダはイエスが死刑に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちと長老たちに返して、言った。

27:4 「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」しかし、彼らは言った。「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」

27:5 そこで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして出て行って首をつった。

<説教>

本日の箇所は〈さて夜が明けると〉(27:1)と始まります。

受難週は金曜日の早朝となりました。

〈祭司長たちと民の長老たちは全員で〉、つまりユダヤの最高法院(サンヘドリン)全体は〈イエスを死刑にするために協議〉しました(1)。

それより数時間前の深夜に彼らは既に一度イエスを死刑にするために議会を開き、イエスは神冒瀆の罪で「彼は死に値する」と決めていました(26:65,66)。

しかし、正式に死刑判決を下すためには二回の〈協議〉が必要でした。

この早朝の二回目の〈協議〉でサンヘドリンとしてイエスの死刑を確定したのですが、それだけではイエスを実際に死刑にすることはできません。

死刑執行の権限は当時ユダヤ人を支配していたローマ帝国にあったからです。

ローマ政府はユダヤ人の宗教問題には関わらない方針でしたので、サンヘドリンがイエスを神冒瀆の罪で訴えても死刑にはできません。

それで、この二回目の協議は、イエスを〈ユダヤ人の王〉(11)だと主張してローマ帝国に反逆している「政治犯」としてローマ帝国の〈総督ピラト〉(2)に訴える手続きのためのものでもありました。

こうしてイエスは〈縛って連れ出〉され、〈総督ピラトに引き渡〉されたのです(2)。

このようにして、「人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡れます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。」(20:18,19)と言われたイエスのみことばのとおりになったのです。

さて〈そのころ(第三版、口語訳「そのとき」)、イエスを売ったユダはイエスが死刑に定められたのを知って(口語訳「見て」)後悔し〉(3)たとマタイは記します。

ユダが〈首をつつ〉て(5)死んだこと(その経緯)をこのように記しているのは福音書ではマタイだけです(ルカは使徒の働き 1:16 以下で、ペテロの言葉として、マタイとは違う言葉でユダの死について記しています)。

ユダは〈後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちと長老たちに返して、言った。「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」〉(3,4)

すぐ前の箇所では私たちはペテロがサンヘドリンによる最初のイエスの裁判の成り行きを見ながらも、イエスが顔に唾をかけられ、拳で殴られ、平手で打たれのをしいられている

のを見ながらも、イエスを三度イエスを否定し、その果てに外に出て行って激しく泣いたことを見ました。

私たちはそれをペテロの〈後悔〉または不十分ながらも「悔い改め」(の始まり)と考えたのですが、「激しく泣いた」(だけの)ペテロに比べると、〈後悔〉した—「思い直し」(21:29,32)た—ユダの方が何か率直でより良いようにも思えます。

〈後悔〉したユダは続けて〈祭司長たちと長老たち〉のところに行き、イエスを引き渡す報酬としてかつて彼らからもらった〈銀貨三十枚〉(26:14-16)を彼らに〈返し〉ました。

これも確かに立派な、なすべき行いではありません。

同時にユダは〈祭司長たちと長老たち〉の前で、「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」と「罪の告白」もしたのです。

ユダは自分が「無実の人の血を売って」しまったことは「罪」だったと確かに認めました。

それは同時に、〈銀貨三十枚〉ユダをユダに支払ってユダと取引をした〈祭司長たちと長老たち〉サンヘドリンもまた共犯者だという「罪」の指摘でもありました。

大祭司の家の庭にいた〈召使いの女〉たちの言葉に恐れをなしてイエスを否定することしかできなかったペテロと比べて、ユダの方が真面目で大胆だったようにも見えます。

そんなユダに対して〈祭司長たちと長老たち〉は、「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」と言い放ちます。

〈そこで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして出て行って首をつった。〉(5)のでした。

このユダの悲惨な「人生の結末を見る」(cf.ヘブル 13:7)に、やはりユダの〈後悔〉はただの後悔にすぎず、悲しみにすぎず、「救いに至る悔い改め」(Ⅱコリント 7:10)ではなかったのです。

「私は罪を犯しました。」と口で言うだけ、心で思うだけでは悔い改めにはなりません。

また、見たように、ユダは確かに「罪の告白」と「不義の報酬」の返却をしたのですが、それは文字通り〈祭司長たちと長老たち〉の前で、彼らに向かってしたことにはすぎませんでした。

つまりユダの心は神に、イエス・キリストには全然向かっていなかったのです。

「悔い改め」とは何よりもまず神に、イエス・キリストに対して向き直り、立ち帰って、新しく生きる、そういう心の転換、生き方の転換なのです。

ペテロは〈イエスのことばを思い出した〉(26:75)のですが、ユダにはそのような様子も見えません。

そして「自分で始末することだ。」という〈祭司長たちと長老たち〉の言葉に聞き、従ったのです。

その結果が〈銀貨を神殿に投げ込んで立ち去〉り、〈そして出て行って首をつった〉ことだったということは要するにユダは「自分の思うやり方で、自分の気が済むように」しただけだったということです。

ユダがしたこと考えたことの内実は「私はイエスには頼らない。イエスの世話にはならない。自分の人生の主は自分だ。自分の罪の埋め合わせも自分で潔(いさぎよ)くするまでだ。」ということであり、それはつまり究極のイエス拒否宣言でした。

〈祭司長たちと長老たち〉と同じようにユダもまた私たちにとって、「その『信仰』に倣ってはならない」「悪い見本」でした。

そしてマタイはやはりこの強烈な「反面教師」ユダを使って、イエスがどういうお方なのかということに焦点を当て、読者に、私たちに教えているのです。

すなわち、ユダも認め、言ったように、そしてユダが考えていた以上に、イエスは確かに罪のない〈無実の人〉です。

そして、私たちが「私は罪を犯しました。悔い改めます。」と言うのであれば、イエスこそは私たちがまず方向転換をして目を向けるべきお方、罪を告白すべきお方、信頼してその御許に立ち帰るべきお方、そのみことばに聞くべきお方、人生の主として従うべきお方なのです。